様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００７４１

研究課題名（和文）Developing a collaborative portfolio of intercultural heritage for online exchange in Spanish as a foreign language

研究課題名（英文）Developing a collaborative portfolio of intercultural heritage for online exchange in Spanish as a foreign language

研究代表者
Ｃｅｃｉｌｉａ・Ｎ　Ｓｉｌｖａ（Silva, Cecilia Noemi）

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：４０３６１２０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：2020-2023研究年度に実施した主な研究のテーマはa)オンライン交流における異文化間コミュニケーション能力、b)文化遺産の内容を用いた学習モデル、c)文化遺産の内容を用いたポートフォリオ作成の3つであった。基づいた概念は異文化間コミュニケーション能力、多様式、文化遺産の3つ。学習の焦点は文化遺産の概念にあり、自分自身の文化遺産についての知識と意識から出発し、それを目標言語の知識と意識に繋げられるよう学生たちを指導することである。文化遺産に関してはA1レベルとA2レベル向けを合わせた内容になる可能性があるため、そういった複合的内容を扱えるように学生たちを指導するモデルの使用が必要となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
2020-2023年度に達成した研究には理論と実践の組み合わせが含まれ、その不十分だった点も合わせて、筆者はこれを文化遺産のコンテンツ作成と複合的内容を扱うためのモデルの使用という、2つの観点を持つ多様なポートフォリオ作成に向けての重要なステップだと考える。論文とプレゼンテーションによりポートフォリオ作成に関する研究成果を発表する際、筆者は本研究の主要な概念間で均衡を保つよう努めた。実際、本研究には文化遺産、異文化間コミュニケーションとアイデンティティといった内容に関する概念と、ポートフォリオ、多様式、コンテンツを取り扱い作成するための手本としてのモデルといった構造に関する概念が含まれる。

研究成果の概要（英文）：During the research period 2020-2023, the three main research topics were the following: a)intercultural communicative competence in online exchange, b)models for working with cultural heritage contents, c)development of a portfolio with contents of cultural heritage. We focused on the design of a theoretical framework to guide students develop portfolios with contents of cultural heritage, based on three concepts: intercultural communicative competence, multimodality, and cultural heritage. The focal point of the work is on the concept of cultural heritage. The underpinning notion related to cultural phenomena is to guide students to start from the knowledge and the awareness of their own cultural heritage and then contact that of the target language. Content of cultural heritage could be complex for levels A1 and A2 thus requires the use of models that guide students to handle those complex contents.

研究分野：外国語教育

キーワード：異文化コミュニケーション　異文化交流　異文化遺産　ポートフォリオ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は対面及びオンライン交流でアイデンティティを定義するために学生たちが作成するコンテンツとしての文化遺産に言及するものである。本研究の出発点は 2 つあり、1 つは文化遺産の概念、もう 1 つはそれらのコンテンツを取り扱い作成するためのモデルだった。

外国語授業及び交流への文化･異文化間テーマの導入は1990年代に始まり､クラムシュ（1993）は教室対話への文化の包含を挑戦と呼んだ。クラムシュ（1993:23-24）によると、文化教育にはこれまで 2 つの方向があった。1 つは文化情報や事実に焦点を合わせるもので、学生を目標文化のアイデンティティからは遠ざけていた。もう 1 つは目標文化における事象を解釈するための手がかりを学生に与えるものだったが、これはまだ受動的なモデルと言える。クラムシュは文化を事実及び意味として､そして学習者と母語話者の意味のやりとりとして見なす第 3 の方向について述べている。クラムシュ（1993:29）は〝外国語教室において教師と学習者はいずれも、文法練習、コミュニケーション活動、テキストについての議論を通じて外国語で行われる文化横断的対話の参加者であり観察者である〟と断言している。

〝授業における文化〟の広い世界の中で本研究が集中して取り組むのは文化遺産のテーマである。

文化遺産とは、所有権とは無関係に、常に発展していく価値観、信念、知識、伝統の反映及び表現と人々が見なす、過去から受け継いだ資源の集合体である。そこには時を経ていく中で人々と場所の間に生まれる相互作用の結果としての環境の全側面が含まれる（ファロ条約 2005）。シルパとキリツィ（2012）はフィンランドとキプロスにおける工芸と文化遺産プロジェクトで得た実地体験を報告しており､その主たる目的は欧州で工芸専門家と工芸の教師のネットワークを展開し、一連の養成イベントやプロジェクトを開発し実行することである。コッコとディロン（2010）は様々な国籍の女子大学生 15 名の個人体験と集団的価値観に反映された工芸、工芸教育、文化遺産の関連を調査した。

2020 年から 2023 年の間に実施したプロジェクトは、A1 と A2 レベルのスペイン語学習者を対象に、複合的な考え（文化遺産）を用いて学習し、モデルを使ってそれらを整理して、簡略なコンテンツを作成することに焦点を当てたため、独創的で価値のあるものとなった。

２．研究の目的

本研究の目的は A1 及び A2 レベル（CEFR）の、外国語としてのスペイン語のための異文化間コミュニケーション能力（ICC）及び文化遺産の概念に基づく相互作用の交流モデルを開発することである。主要な論点は A1-A2 レベルのスペイン語学習者が文化・異文化間能力を高め､言語技能を向上させるためにはどのタイプの交流活動が効果的で実現可能なのかということである。

2020 年度に達成した研究は、人間が文化的に建造された人工物（文化財）、概念、活動を物質世界または他者の活動のための活動に展開するプロセスとしての仲介の概念（ラントルフとソーン､2006）を中心とするオンライン交流での異文化間能力のための理論的枠組み作りに焦点を当てた。

2021 年度に達成した研究では、仮想環境の特徴及び語学授業での文化教育のためのモデルについて議論することにより、オンライン交流における異文化間能力のための理論的枠組みを強化することに焦点を当てた。

2022 年度に達成した研究では、文化遺産の概念と、それを異文化間コミュニケーションのモデ

ルと組み合わせるための理論的枠組み作りに焦点を当てた。
2023 年度に達成した研究では、ストーリーテリングと協同読解という 2 つの教育的実践と組み合わせた異文化間交流のテーマとしての遺産の概念に焦点を当てた。

３．研究の方法

本研究のためのデータと実例は日本人学生が参加したマドリード･コンプルテンセ大学での 4 度の研修旅行と通常授業、並びに 1 度のオンライン交流から取得した。
文化遺産のコンテンツを作成し整理するよう学生に指導する活動に関して、我々は主に以下のモデルを使用した。
(1)オンライン交流で文化財と慣行について説明し発表するための文化財と慣行の五角形（モラン、2001）。文化財を分析するための五角形には文化財、慣行、人々、観点、コミュニティの要素が含まれる。文化財についてのスピーキングでは、学生は 5 つの主要な論点に従うこととする。
文化財：具体的にはどんなものか？　どこに行けば見つかるか？；慣行：どのように用いるのか？　どんなときに？；人々：どのような人々がこれを用いるのか？；コミュニティ：どのような集団がこの対象物を用いるのか？；観点：文化においてこの対象物はどんな意味を持つのか？
慣行という言葉には習慣、伝統、習俗が含まれ、慣行について話すためにモランは先に述べた五角形を以下の要素で補完することを提案している。すなわち、行為、運用、筋書き、実演の各要素である。

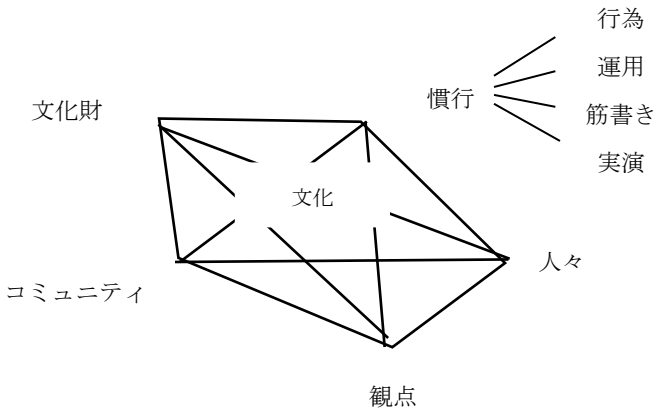

図 1．文化財と慣行の五角形［出典：モラン（2001）『人工物と慣行』p.51 及び『文化的慣行』p.58］

(2)サーリー(2005)が提唱した遺産サイクルとは、過去に関与して未来を築き保護するという考えに基づく文化構造であり、我々はマドリード・コンプルテンセ大学での研修旅行で日本文化を紹介する際にこれを使用した。このサイクルには楽しみ、理解し、尊重し、保護するという 4 つの要素がある。最初の行動は文化的要素を楽しむことであり、そこからそれを完全に理解したいという願望が生まれ、理解したとき人々はその文化的要素を尊重し、1 つの要素を尊重することは人々がそれを守ることにつながる。

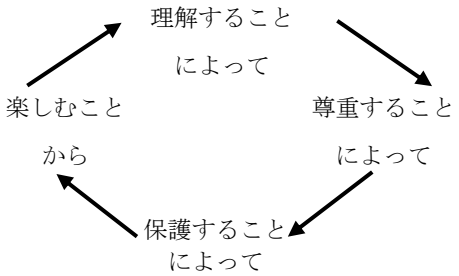

図 2．遺産サイクル［出典:サーリー(2005)『未来へ。2005-2010 に向けた我々の戦略』］

⑶戦略的協同読解（CSR）はジャネット・クリングナーとシャロン・ヴォーンが 1996 年と 1998 年に開発した手法である。学生自身の文化遺産と目標言語の文化遺産を統合するための手本として通常授業で使用した。

４．研究成果

2020－2023 研究年度に筆者は理論的枠組みを構築し、これを活動設計モデルとして文化遺産のコンテンツを作成しポートフォリオに記入するよう学生を指導した。

⑴主要な研究テーマは以下の 2 つ。①言語教育における文化遺産、キーコンセプト：日常性。②文化遺産のコンテンツの整理と作成のためのモデル、キーコンセプト：仲介。

①トルコ言語協会（バティヤル・カラデニズ、2020）の定義によれば、遺産とは〝ある世代が次の世代に残すもの〟である。遺産の概念の範囲は広がり、記念碑等に焦点を当てていたのが進化して、要素や習慣、信念、そして現在の人々の生活を形づくるすべてのものが含まれるようになった。UNESCO は遺産を次のように分類している。動産文化遺産（彫刻、絵画、写本）、無形文化遺産（儀式、口承伝統、芸能）、自然遺産（文化的景観）、有形文化遺産（建造物、史跡、記念碑）、水中文化遺産（水中遺跡及び都市）、不動文化遺産（遺跡、歴史的都市）。

文化交流において、遺産の解釈は有用な手法であり、異文化間対話の有益なコンテンツとなりうる。異文化間会合に参加者を有意義な方法で引き入れるには、文化遺産の解釈が故郷の親しみある環境と結びついた実地体験の意味を補強するものでなければならないという側面を考慮すべきである。ゴロンビニ（2020）は日常性の概念を調査し、遺跡は、人々がそれを人間にとって意味のある場所に変え、日常生活や社会慣行において重要な役割を果たす生活の次元を獲得して初めて、遺跡として尊重されるとした。ルーヒ（2017）は、文化遺産とは共有の絆を意味し、人々に彼らが誰でどこからやってきたのか、そしてアイデンティティの自覚についてのさらなる知識を与えるものであると主張している。本研究では日常生活で経験する文化遺産という観点から絆を重要視している。

②文化的コンテンツを取り扱い、作成するためのモデルには三段階あると我々は見なしている。a)文化的無意識についてのエドワード・ホールズの貢献（1973、1976）、b)言語と文化の関係を体系化し、教室での実践に持ち込んだバイラム(1991)の努力、c)ショールズ(2019)による、ひとつのまとまりとしての言語と文化の出発点。第一段階では、〝隠された文化〟、隠れた文化と文脈の役割を強調したい。第二・第三段階の焦点は言語と文化の統合にある。異文化間教育用に設計された、いくつかのモデルを検討した結果、筆者は先に述べた 3 つのモデルを選んだ。特に注意を払ったのが仲介の概念、古典的観点と CEFR が提唱する新しい見解である。最初のケースでは、学生が目標に向けて文化的に構築された人工物、概念、活動を展開するよう（ラントルフとソーン　2006）指導する。2 番目のケースでは、学生が社会の仲介者となり、メッセージを運ぶ橋を架けて聞き手に届けるのを手助けする。いずれのケースも、学生は日本文化と受容者の間の仲介者であり、状況に応じてメッセージを作成し届けなければならない。

⑵学生は 3 つの状況で文化遺産のポートフォリオを作成した。すなわちオンライン交流（交流体験 1 回：温泉、お祭り、花見、日本の習慣）、マドリードでの海外研修（6 回の研修：書道、日本のゲーム、スポーツ、習慣、折り紙、茶道）、通常授業（1 学期：年齢に関連した儀式と神話）。

学生たちの反応によれば、自分自身の文化について研究し発表することは重要であるとわかった、また外国人の仲間と話せて満足し、それによりスペイン文化についての質問をしやすくなって、話す自信がついたという。文化遺産に基づく授業に関して、学生たちは交流と発表でキーワ

ードを使えたと返答した。授業で構造と特定の語彙を習い、文化的内容を用いて文法構造の演習をするのがより面白くなった。加えてアイデンティティの観点から、活動の内容は自分自身の文化、日常文化の詳細や側面について考えさせるものだったという。

参考文献

Bahtiyar Karaddeniz, C. (2020). Assessment for Awareness and Perception of the Cultural Heritage of Geography Students. *Review of International Geographical Education (RIGEO)*, 10 (1), Special Issue, 40-64. DOI: 10.33403rigeo.640722 **http://www.rigeo.org/vol10no1/Number1Spring/RIGEO-V10-N1-2.pdf**

Byram, M. (1991). Teaching Culture and Language: Towards an Integrated Model. In D. Buttjes & M. Byram (Eds.), *Mediating Languages and Cultures: Towards an Intercultural Theory of Foreign Language Education* (pp. 17-30). Multilingual Matters.

Convention on the Value of Cultural Heritage for Society. Faro Convention 2005, opened for signature 27 October 2005 entered into force 1 June 2011. **https://www.coe.int/en/web/culture-and-heritage/cultural-heritage**

Golombini, L. (2020, December). Everyday Heritage and Place-Making. *ESPES*. Vol. 9, Number 2, pp. 50-61. **https://doaj.org/article/6155a0a403844cc58e2c5d53c6471fbb**

Hall, E. (1973). *The silent language.* Anchor Books A Division of Random House, Inc.

Hall, E. (1976). *Beyond Culture.* Anchor Books A Division of Random House, Inc.

Kokko, S. & Dillon, P. (2010). Crafts and craft education as expressions of cultural heritage: individual experiences and collective values among an international group of women university students. *Int J Technol Des Educ* (2011) 21:487–503 DOI 10.1007/s10798-010-9128-2. **https://link.springer.com/content/pdf/10.1007/s10798-010-9128-2.pdf**

Klingner, J. K. & Vaughn, S. (1998). Using Collaborative Strategic Reading. *Teaching Exceptional Children ResearchGate* DOI 10.1177/004005999803000607 **file:///C:/Users/user/Downloads/Using_Collaborative_Strategic_Reading%20(3).pdf**

Kramsch, C. (1993). *Context and Culture in Language Teaching*. Oxford University Press.

Lantolf, J. &Thorne, S. (2006). *Sociocultural Theory and the Genesis of Second Language Development*. Oxford University Press.

Moran, P. (2001). *Teaching Culture. Perspectives in Practice.* Heinle, Cengage Learning.

Rouhi, J. (2017). Definition of Cultural Heritage properties and their values by the past. *Asian Journal of Science and Technology,* Vol. 08, Issue, 12, pp. 7109-7114. **https://www.researchgate.net/publication/322224022_DEFINITION_OF_CULTURAL_HERITAGE_PROPERTIES_AND_THEIR_VALUES_BY_THE_PAST**

Shaules J. (2019). *Language, Culture, and the Embodied Mind. A Developmental Model of Linguaculture Learning*. Springer Nature Singapore Pte. Ltd.

Sirpa, K. & Kiritsi, A. (2012). Cultural Heritage Education for Intercultural Communication. *Sage Journals International Journal of Heritage in the Digital Era*, Vol. 1 Issue 1 Suppl. **https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1260/2047-4970.1.0.165**

Thurley, S. (2005). Into the future. Our strategy for 2005-2010. *Conservation Bulletin [English Heritage]* Issue 49 Summer 2005. **https://historicengland.org.uk/images-books/publications/conservation-bulletin-49/cb-49/**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Cecilia Noemi Silva	４．巻 22
２．論文標題 A Spanish Project Based On The Concept Of Cultural Heritage	５．発行年 2022年
３．雑誌名 EDUlearn22	６．最初と最後の頁 7845-7848
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21125/edulearn.2022.1835	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Cecilia Noemi Silva	４．巻 8
２．論文標題 Spanish for Practical Purposes: A Multilevel Class Adapted to Students’ Interests	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東北大学２０２１年第８号 言語・文化教育センター年報	６．最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Cecilia Noemi Silva	４．巻 8
２．論文標題 Models in Intercultural Communication: from Theory to Practice	５．発行年 2022年
３．雑誌名 高度教養教育・学生支援機構紀要第8号	６．最初と最後の頁 185-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Cecilia Silva	４．巻 10
２．論文標題 Intercultural encounters: re-definition of space and new challenges for theory and practice	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Kansai Gaidai University イベロアメリカ研究センターニューズレター	６．最初と最後の頁 11-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Cecilia Silva	4．巻 7
2．論文標題 The Concept of Mediation in Online Classes: From the campus classroom to Google Classroom	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Bulletin of the Institute for Excellence in Higher Education Tohoku University	6．最初と最後の頁 319-329
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Cecilia Silva	4．巻 6
2．論文標題 Building a Virtual Space for Intercultural Exchange	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Bulletin of the Center for Culture and Language Education Tohoku University	6．最初と最後の頁 7-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　2件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 Cecilia Noemi Silva
2．発表標題 Online Spanish Program from the perspective of the 5 Cs
3．学会等名 JALT PanSIG Conference 2022（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Cecilia Noemi Silva
2．発表標題 Portfolio based on the concept of cultural heritage
3．学会等名 JALT ICLE SIG 2nd Conference（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Cecilia Noemi Silva
２．発表標題 Encuentros interculturales desde la perspectiva del aprendizaje transformador
３．学会等名 ASELE 32th International Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Cecilia Noemi Silva
２．発表標題 Traditional and new models in language and culture pedagogy
３．学会等名 JALT 48th Annual Conference on Language Teaching and Learning（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Cecilia Noemi Silva
２．発表標題 Nuevos espacios de interaccion para las clases de lengua y los encuentros interculturales
３．学会等名 sakurELE Instituto Cervantes Tokyo（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Cecilia Noemi Silva
２．発表標題 Re-define features for virtual places: a) language classes b) intercultural encounters
３．学会等名 JALT ICLE SIG 1st Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Cecilia Noemi Silva
２．発表標題 Clases hibridas en el marco de la Teoria de la Actividad
３．学会等名 47th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Material Exhibition JALT 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Cecilia Noemi Silva
２．発表標題 Tohoku University: virtual response to intercultural interaction
３．学会等名 47th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Material Exhibition JALT 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Cecilia Silva
２．発表標題 Intercultural encounters: re-definition of space and new challenges for theory and practice
３．学会等名 Challengces in the New Educational Reality Center for Iberoamerican Studies, Kansai University of Foreign Studies（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Cecilia Silva
２．発表標題 Intercultural Competence Activities in the frame of Active Learning
３．学会等名 46TH Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition Jalt2020
４．発表年 2020年

１．発表者名 Cecilia Silva
２．発表標題 New spaces for language education: challenges for theory and practice
３．学会等名 BELTA (Bangladesh English Language Teaching Association) Professional Development（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関